

「日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）」は、良好な河川の保全・再生が創り出す健全な水循環系及び歴史・文化と共存する地域社会の実現に向け、河川再生について共に考え次の行動へと後押しする未来志向の情報を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に活動しています。また、「アジア河川・流域再生ネットワーク（ARRN）」の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、同時に海外の素晴らしい取組みを日本国内に還元する役割を担います。

目次

	Pages
➤ JRRN 事務局からのお知らせ	1
➤ 会員寄稿記事	4
➤ 会議・イベント案内	17
➤ 会員募集中	18

JRRN 事務局からのお知らせ (1) JRRN Activity Report

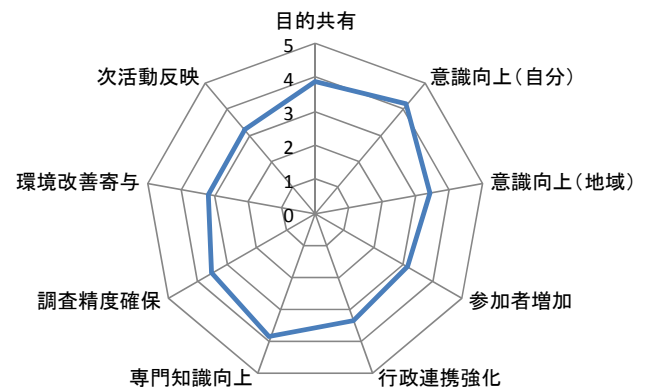
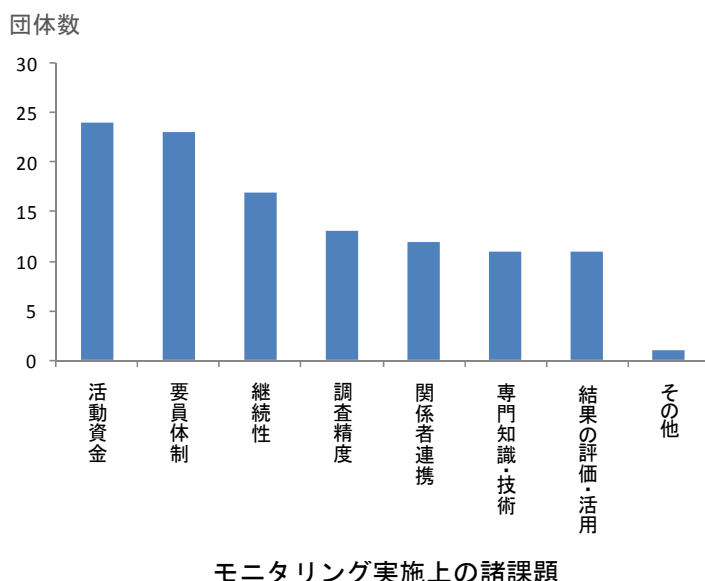
『地域で取組む河川環境の評価～河川再生の順応的管理に向けたモニタリング事例集～(仮題)』発行に向けた活動進捗報告 — アンケート分析結果に基づくヒアリング調査がスタートしました！

本誌先月号でもご案内の通り、JRRN では、『筑波大学白川（直）研究室「川と人」ゼミ』と連携し、『地域で取組む河川環境の評価～河川再生の順応的管理に向けたモニタリング事例集～(仮題)』の制作に取り組んでいます。

本活動の進捗報告として、8 月に実施したアンケート分析結果より見えてきたモニタリング推進に向けた諸課題、及び 10 月より実施中のヒアリング調査についてご紹介します。

【1】アンケート分析結果（地域で取組む河川環境評価の更なる推進に向けた課題の抽出）

全国 48 団体よりご回答頂いたアンケート結果の整理・分析作業により、地域が主役となった河川モニタリング活動の更なる推進に向けたいくつかの課題が浮かび上がってきました。



モニタリング活動に対する自己評価（平均値） (5:満足, 4:やや満足, 3:そう思う, 2:やや不満, 1:不満)

回答者による自己評価からも、モニタリング活動が関係者の意識向上や専門知識の向上に寄与した一方で、活動への参加者増加や環境改善効果につながらないこと、また調査成果を次の活動に活かす方策が見出せないなどの悩みも見えてきました。

河川モニタリング推進の課題

課題	主なキーワード
①目標設定 (活動動機)	・モニタリング目的 ・モニタリング対象・方法 ・モニタリング実施計画 ・合意形成
②枠組み整備 (実施体制)	・モニタリング要員 ・関係団体連携構築 ・活動資金調達 ・継続性
③専門性強化 (技術)	・専門知識向上 (物理・生物) ・調査手法 (技術) ・結果の評価手法 ・順応的管理

【2】ヒアリング調査

河川モニタリング活動の更なる推進に向けた諸課題に対し、その克服のヒントを得ることを目的としたヒアリング調査を10月より実施しております。本調査では、アンケート回答団体のみならず、日頃連携する河川管理者にもお話を伺い、様々な経験に基づく助言を頂くことを目指しております。ここでは、10月に実施したヒアリング活動の事例をご紹介します。

なお、成果を集約した事例集の発行は2014年1月頃を予定しておりますので、引き続き、皆様のご協力とご支援をよろしくお願いいたします。

本活動は、公益財団法人河川財団の河川整備基金の助成を受けて実施しています。

(JRRN 事務局・和田彰)

釧路国際ウェットランドセンター & 国土交通省北海道開発局釧路開発建設部 (2013年10月22日)

■ヒアリング先：

1. 釧路国際ウェットランドセンター： 菊地様、齊藤様
2. 国土交通省北海道開発局釧路開発建設部： 市川様

■ヒアリング担当者：

筑波大学白川（直）研究室： 鴨志田、坂本

■ヒアリング実施日： 2013年10月22日（火）

■ヒアリング担当者よりコメント (by 鴨志田)

釧路川および釧路湿原に関する情報発信を中心に活動されている釧路国際ウェットランドセンター（KIWC）では、活動理念からモニタリング時の工夫に至るまでを丁寧にご説明頂き、実り多きヒアリング調査となりました。また、釧路開発建設部では、釧路湿原や旧川復元箇所の現地をご案内頂き、より理解が深まりました。特に、釧路町の細岡展望台から望む湿原や蛇行した釧路川は、河川環境の豊かさについて改めて考えさせられる佳景でした。

今回の訪問からは、釧路川をとりまく行政や市民の環境保護意識の高さが感じられました。また、それを行動に移すための仕組み作りが進んでおり、積極的な活動の成果として表れているように思えました。釧路川の事例は、今後分析を進めていくにあたっての重要な足がかりになると思います。



左から鴨志田、坂本、菊地さん、齊藤さん



左から鴨志田、市川さん

山崎川グリーンマップ & なごや生物多様性保全活動協議会 (2013年10月31日)

■ヒアリング先：

1. 山崎川グリーンマップ： 大矢代表、メンバー皆様
2. なごや生物多様性保全活動協議会： 宇地原様、鵜飼様

■ヒアリング担当者：

JRRN 事務局：和田・木村、 筑波大学白川（直）研究室： 田中

■ヒアリング実施日： 2013年10月31日（木）

■ヒアリング担当者よりコメント (by 和田)

大矢代表に案内されて山崎川に到着すると、明るく元気な山崎川グリーンマップの皆様、なごや生物多様性保全活動協議会の鵜飼さんが出迎えてくれました。日頃モニタリング活動を行う山下橋下流付近から上流の山崎川親水広場を案内頂き、山崎川での様々な活動や苦労話もご紹介頂きました。更に東山荘でのヒアリングでは、子供達や地域とともに外来種駆除を進めていく上での工夫やアドバイスを頂戴し、主婦のチーム力に支えられた皆様の熱い思いや活動の蓄積に感銘を受けました。

続いて訪問したなごや生物多様性保全活動協議会（事務局：生物多様性センター）では、宇地原さんより、山崎川での活動を応援する立場からの、更なる活動の推進に向けた貴重なご意見を頂きました。

パートナーシップに基づく地域で取組む河川再生活動の規範とも言える山崎川での知見や工夫を、事例集を通じて皆様にお届けできるよう努めてまいります。現地でお世話になりました皆様に感謝申し上げます。



山崎川グリーンマップの皆さんとともに



右から宇地原さん、鵜飼さん

「第5回欧州河川再生会議(5th European River Restoration Conference 2013)」が開催されました

「第5回欧州河川再生会議(ERRC2013)」が、2013年9月11日(水)～13日(金)にオーストリア・ウィーンで開催されました。

この会議は、JRRN 及び ARRN とも交流を深めている欧州河川再生センター(ECRR)が4年に一度程度開催する国際会議で、欧州の河川再生に関わる最も大きな会議として、欧州各国の政府関係者(国レベル・地方レベル)、NPO、大学研究者、コンサルタントなど幅広い層の専門家が多数参加します。



会議風景 (ERRC2013 写真集より)

また、本年の会議から、豪州に拠点を置く国際河川財団(International Riverfoundation)主催の「欧州河川賞(European River Prize)」が新設され、ERRC2013の中でその選考と表彰が行われた結果、

約半世紀に渡り流域内関係国及び機関が連携して統合水資源管理に取り組んできた「ライン川」が初代欧州河川賞の栄冠を手にしました。

なお、本会議での注目の一つに、会議成果を一枚の絵に仕上げるというユニークな取り組みが挙げられます。



成果取りまとめ中 (ERRC2013 写真集より)

本会議で得られた成果、発表スライドや関連資料、また会議当日の写真等は ERRC2013 ホームページ(www.errc2013.eu/)内の最新ニュースレターでご覧頂けます。欧州の最新河川再生事情にご興味のある方は是非ともご参考にして下さい。(英語版)

■ERRC2013 開催報告(最新ニュースレター)

<http://www.errc2013.eu/index.php/program/second-announcement/archive/view>



ERRC 2013 Visual Summary: <http://www.restorerivers.eu/Portals/27/ERRC%20Visual%20Summary2.pdf>

(JRRN 事務局・和田彰)

低平地居住の新たな挑戦

寄稿者：寺川 陽 (JRRN 会員)

埼玉県越谷市の洪水ハザードマップ*を眺めると、市の東南部に 1.5 km 四方ほどの真っ白いエリアがあるのに気付く。市の東半分のほとんどのエリアが利根川、江戸川および荒川が 200 年に一度の確率で生起する洪水による想定氾濫区域として、浸水深に応じて青色の濃淡で表示されている中に位置する越谷レイクタウンの区域である。

※埼玉県越谷市の洪水ハザードマップ

<http://www.city.koshigaya.saitama.jp/map/hazard/d.html>

2008 年 3 月に J R 武蔵野線の新駅として設置された「越谷レイクタウン駅」に降り立つと、もとの水田地帯の面影は全くない。都市再生機構 (UR) による特定土地区画整理事業計画が認可されたのが 1999 年 12 月。それから約 13 年で約 225 万 m² の造成工事が概成した。駅の北側地域ではマンションや戸建て住宅が立ち並び、2008 年 10 月にオープンした商業施設が圧倒的なスケールで整備されている。ちなみに、700 の専門店を擁するこの商業施設の延べ床面積は 3 棟合計で約 24.5 万 m²、これは日本最大級、世界でも 15 番目だそうだ。駅の南側では引き続き住宅地等の整備が続いているが、この勢いでいけば計画人口 2 万人規模の新しいまちができあがるのに、そう時間はかからないだろう。

越谷レイクタウンは、名前の通り、中心部に大きな池があって、その周りに住宅や商業施設が配置されているところに特徴がある。この池は、中川の洪水時にその流量の一部を一時的に貯留し、河川の氾濫被害を防止するための調節池として人工的に作られたものだ。そして、この池を掘った土を盛ることで、池周辺エリアの地盤をかさ上げして、「洪水ハザードマップの中の真っ白い地域」すなわち、浸水リスクが極めて低い宅地・商業地を造成したのである。開発計画検討の当初は、調節池と河川を開水路でつないで、住宅地から船で直接中川に出られるようなリゾート的住宅地を目指すアイデアもあったと、当時の経緯を知る方に聞いたことがある。実際は、流入部、流出部ともに管路で川とつなぐられ、河川の流量に応じて、水門やポンプを操作することによって池の水位を制御し、洪水調節に資する仕組みになっている。盛土によって氾濫域が減る分、池を掘って貯留スペースを確保することによって

周辺地域にマイナスの影響を及ぼさない。それだけでなく、洪水時の河道流量の一部を貯めこむことによって下流域の洪水氾濫防止・軽減にも役立つのである。大相模池と名付けられた調節池は面積約 40 万 m² (上野の不忍池の約 3 倍)、周辺には遊歩道や棧橋が整備されており、地域に住む、訪れる人たちに快適な水辺空間を提供する。勿論、将来にわたって、水質や景観を含む「快適さ」を保つためには、地域に暮らす人々の合意と参画による、継続的な維持管理の努力が不可欠であることは言うまでもない。

構想段階を含めれば、20 年がかりで洪水氾濫減に新たなまちを生み出したこのプロジェクトは、以下に述べる 3 つの点で、我が国における、未来志向の低平地居住の先導的事例ともいえるべきものである。まず第一に、盛土造成した地域は、大規模水害発生時に住宅等の浸水被害リスクが極めて小さいとともに、周辺の浸水地域からの一時的な避難場所となりうる。大規模商業施設の倉庫は、事実上、非常時における食料・資材庫としての機能を果たすだろう。第二に、J R の駅を中心とする 1.5km 四方ほどのコンパクトなエリアに、住宅や商業施設等を集積することにより、日常生活上の移動がほぼ徒歩+自転車圏内で完結する。今後の施設誘致やまちの自律的な発展に期すべき機能もあろうが、いわゆる「コンパクトシティ」としての基本条件が整っている。第三に、これは若干うがった見方かもしれないが、水田地帯に新たな都市的生活の場を整備することで、減反政策に寄与し、従来農業用水として使われてきた水資源の一部を他用途に転ずることによって、圏域における水需給ひっ迫の解消に向けた一助となることも期待できる。

これまでの「越谷レイクタウン」プロジェクトの推進にあたっては、土地所有者をはじめ地域の多くの利害関係者の合意形成に相当の時間とエネルギーを要したであろうことは、想像に難くない。長年にわたるプロジェクト関係者の尽力に心から敬意を表したい。とともに、地球気候変化に起因する水害リスクの増大が懸念される中で、安全で快適な低平地居住のよき先例となることを期待したい。

(※ 本稿は、筆者個人の見解に基づくものです)

「第9回川の日ワークショップ関東大会」(10月6日開催) 参加報告

寄稿者：川畑遼介（筑波大学白川（直）研究室『川と人』ゼミ・JRRN 団体会員）



図1 ワークショップの会場の様子

1. はじめに

10月6日（日）、東京農業大学で、第9回「川の日」ワークショップが行われました。私達筑波大学白川研究室から3名（川畑遼介、鴨志田穂高、坂本貴啓）が発表し、2名が運営スタッフ（木村夏菜、能登江梨香）として参加しました。

次章では、各発表者より、発表内容についてご紹介します。

2. 発表内容

○川畑遼介（工学システム学類4年）

◇茨城県北部の上流河川の物理環境の定量的評価



図2 川畑遼介による発表

この研究は、水力発電所の取水口の上流（水量が多い）と下流（水量が少ない）において、それぞれの川の流れや地形を計測し、どのような違いがあるかを考察する研究です。発表後は、褒めていただいたりご指摘を頂いたりと様々な反応を得られました。中でも、最も印象に残ったのは、「研究や調査をする際は、その川に携わっている他の人や、近所の人を巻き込んで行動すること」という言葉です。この意見は自分のみならず他の団体にも言われており、会場の多くの方が、頷いていたのが印象的です。

○鴨志田穂高（国際総合学類4年）

◇遠賀堀川の未来を拓くシンポジウム開催報告



図3 鴨志田穂高による発表

今年7月に行われた「遠賀堀川の未来を拓くシンポジウム」について報告を行いました。私たちが遠く離れた遠賀堀川とかかわるようになった経緯や、シンポジウム開催にむけた準備の過程などを交えながら、1つのイベントをつくりあげることの意義について発表しました。ポスターセッションでは、多くの方からご質問をいただき、あらためてその意義を見直す良い機会となりました。関東大会に九州の川が登場するという珍事に、会場の輦蹙(ひんしゅく)を買わないかと不安な思いもありましたが、みなさん温かい目で発表を見守ってくださいました。

○坂本貴啓（システム情報工学研究科博士後期課程 1 年）

◇109 水系への挑戦！～河川市民団体の調査を通じて～



図 4 坂本貴啓による発表

研究テーマである「河川市民団体の活動量の定量的分析」の研究について紹介したものでありましたが、今回は研究内容にはほとんど触れず、調査で周った川、これから周る川を紹介し、109 水系制覇への目標を語った。会場からは「あなたは高校時代から川の世界に足を踏み入れ、こうして日本全国の川を巡っているのだから、これから先は「川の語り部」を目指して頑張りなさい。」と重大な使命を命じられました。また、最終的にグランプリをいただくこととなり、研究の意義を改めて見出すことができたと同時に、研究成果を少しでも出していけるように努力をしていかなければならないと気持ちを新たに致しました。全国一律に行っている河川市民団体アンケートにも関東大会に参加されていた多くの団体の方が協力を申し出て下さり、大変実り多きワークショップとなりました。

川のワークショップは全国大会、九州大会、福岡大会は参加したことがありましたが、選考投票で、コメントを添える形式は初めてであり、発表者にとっては大変励みとなるもので、大変素晴らしい工夫だと感じました。

■ JRRN 会員皆様からの寄稿記事を募集しています！

旅先で見かけた水辺の風景や思い、水辺再生に関わる様々な活動報告、また河川環境再生に役立つ技術等、JRRN 団体・個人会員皆様からの寄稿記事をお待ちしています。（JRRN 事務局）



図 5 参加した白川研『川と人』ゼミ 5 名

表 1 表彰内容とコメント

氏名	賞名	賞状のコメント
川畑遼介	入賞	河川環境の定量評価に地道に取り組む姿勢に敬意を表します。何度も現場に通う中で成果に繋がるひらめきあると期待しています。
鴨志田穂高	入賞	3度の現地訪問、大きな声での発表、学生らしい元気が感じられてとても良かった。遠賀堀川の経験を活かして日本の河川と人達が元気になるリーダーに育ってください。
坂本貴啓	グランプリ	今後の河川管理は、市民団体に期待するところがあり、今回、市民団体を定量的に調査することは、新たな調査であり、今後に期待。

3. おわりに

今大会にも多くの団体が参加し、みなさん思い思いに自分の地域の「いい川」をアピールされていました。11 月の全国大会も、関東の団体が盛り上げてくれることを期待したいと思います。



川系男子の『川と人』めぐり No. 19～北海道の川(1)～

坂本貴啓（筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 白川直樹研究室『川と人』ゼミ）

『川と人』めぐり

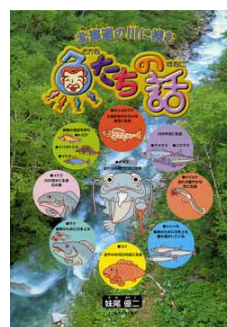
研究室のゼミ名『川と人』ゼミという言葉をもじって、『川と人』めぐりのタイトルで連載していきます。テーマは川と人。川が好きではない『川系男子』が川めぐりをしながら、川への思いや写真・動画などをご紹介します。

♪秋の夕日に照る山もみじ 濃いも薄いも数ある中に 松を彩る楓や蔦は 山の麓の裾模様

（唱歌『紅葉』 作詞：高野辰之 作曲：岡野貞一）

表1 北海道調査の『川と人』めぐり訪問先

日付	午前	午後	訪問先
10月20日(日)	札幌入り	豊平川(石狩川)	藻岩山 NPO法人水環境北海道
10月21日(月)	十勝川	十勝川	十勝開発建設部 エールセンター十勝 NPO法人帯広NPO28サポートセンター
10月21日(火)	釧路川	釧路川 網走川	釧路開発建設部 釧路湿原 釧路国際ウェットランドセンター
10月22日(水)	網走川 常呂川	湧別川 渚滑川	北見河川事務所 遠軽開発事務所 NPO法人グラウンドワーク西神楽
10月22日(木)	美瑛川、永山新川 (石狩川)	天塩川	旭川河川事務所 川のふるさと交流館さらら 名寄河川事務所 NPO法人なよろ観光まちづくり協会
10月23日(金)	天塩川	留萌川	幌延河川事業所 留萌ダム管理所
10月23日(土)	石狩川	石狩川 羽田着	認定NPO法人カラカネイトンボを守る会 篠路福移湿原



妹尾さんの著書（共著含む）



図1 札幌市内を流れる豊平川(手前)と石狩川(奥)

1. 北の大地へ（藻岩山展望台，NPO 法人水環境北海道）

2013年10月20日(日)～26日(土)にかけて北海道の市民団体調査をスタート。北海道はゼミ合宿で2011年に天塩川を周って以来、今回は新千歳空港からスタートし、道東、道央、道北をぐるっと周る。残りの水系は11月後半に調査を考えているので、2回に分けて北海道の川めぐりを紹介したい。本当は夏の一番青々しい時期に北海道を周りたかったが、

スケジュールの関係でこの時期に、降り立った北の大地はすっかり紅葉色になっていた。

北海道ということで、寒いだろうと厚着をして身構えてきたのだが、まだそうでもなく、札幌は心地よいヒンヤリさが残る体感であった。

新千歳空港から札幌駅に向かい、駅を降りて向かった場所は藻岩山。モリスカーというケーブルカーにより短時間で頂上に登ることができる(図1)。頂上から石狩川と豊平川の流れを望み、広大な北の大地の川に旅の安全と実りを祈願して川をめぐった。

2. 北の大地と川の外科医

藻岩山を訪問した後、NPO 法人水環境北海道の妹尾優二さんを訪ねた。妹尾さんは一般社団法人流域生態研究所の所長もされており、多自然川づくりに大変明るい方である。北海道のほとんどの川の改修や魚道の改築などの委員会には妹尾さんが参加されており、言ってみれば北の大地の川の外科医である。日本の多自然川づくりの先駆者であり、様々な川に出向き、ちょっと岩の配置や流れを変えてあげたり、効果的な魚道を設置したりと数々の成果をあげられている。妹尾さんが川に行かれるとすぐに川の中に入り、目につく岩を動かして魚が住みやすくしたりしている。妹尾さん曰く、「川は自由になりたがっている。その声に耳を傾けてあげるのが私らの役目。」北の大地の川の外科医は今日もどこかの川で手術に励む。

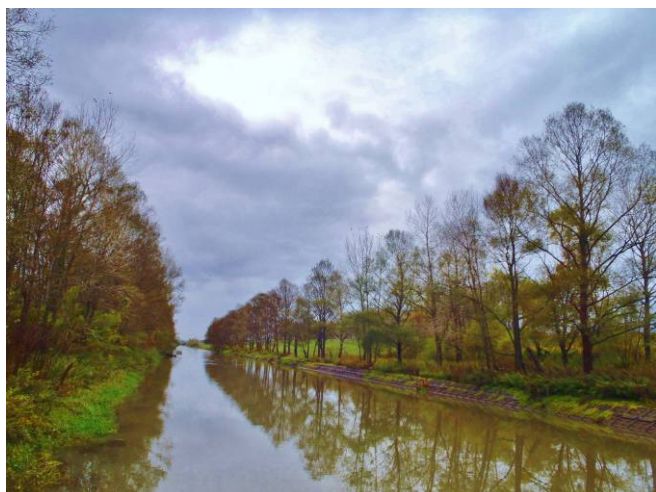


図2 札内川とケショウヤナギの川風景

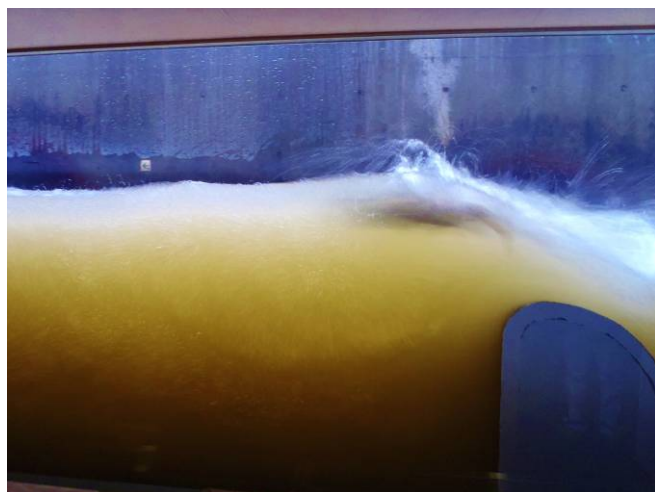


図4 魚道観察室から見るサケの遡上の様子



図3 クレーンでのサケの漁獲（千代田堰堤付近）



図5 エールセンター十勝

3. 十勝川の川風景とエールセンター

21日（2日目）、帯広からスタート。帯広開発建設部を訪ねる。調査に関する打ち合わせをしたのちに十勝川を案内していただく。十勝川は川の街で、帯広川、札内川、音更川、士幌川などいくつかの川が合流している。流域面積は9,010 km²で基本高水流量も10,300m³/sとなっていて大きな流域である。

十勝川水系の札内川は大きな河川敷が広がっており、本州の中流域の1級河川の河川敷の2～3倍はある。そのため、サッカーコートや野球場などスポーツ利用も大変盛んである。また札内川には固有種のケショウヤナギが川沿いに生えていて、枝振りもよい木であるため、十勝独自の川風景を創り出している（図2）。しかし、ケショウヤナギは礫河原のある場所に自生するため、礫河原の保全が重要という。そのため上流の札内川ダムでは今年度から新たにダムの貯水量に余力のある際に環境流量としてフラッシュ放流を試験的に行っており、河川内の陸地化を防止し、礫河原保全を試みている。帯広開発建設部のKさんは十勝の出身で、昔からこの風景に馴染んでこられたそうで、Kさん曰く、「札内川のケショウヤナギは冬の雪化粧した姿や夏のみずみずしさも綺麗なんです。季節を変えてまた来てみて下さい。」

サケも多く遡上し、千代田堰堤（堰堤という名称だが砂防施設ではなく取水堰）付近の魚道では、十勝川漁協がクレーンで大きな籠を沈め、一定時間ごとに引揚げ、産卵・養殖用の個体を採っていた（図3）。

僕の故郷の遠賀川はサケの遡る南限の川と言われているが、遡っても数匹程度だが、ここでは目の前を勢いよくサケが駆け上がり、網にもたくさんの個体が収まっている。こんな大きな魚が次々川に遡ってくる北の川はこの時期とても賑やかになる。なお、サケの遡上については、千代田新水路の分流堰にある『魚道観察室とどろ一ど』にて川の断面をガラス越しに見ることができ、サケの遡上を間近で確認することができる。

最後にエールセンター十勝を訪ねた（図5）。札内川と帯広川の合流地点付近に建っている。ここを拠点として活動している帯広NP028サポートセンターの千葉利光さんにお会いし、活動の特徴や設立の経緯などをお聞きした（内容は割愛）。

千葉さんのような素晴らしい指導者と整った水辺の拠点があることは十勝の子供達にとっても大変幸せなことだ。事実、屋上には多くの子供達がここに遊びに来ていた。十勝川、来年の夏に川風景を楽しむにゆっくり訪問したい。



図6 釧路湿原内を蛇行して流れる釧路川

4. 釧路湿原と人々の挑戦（釧路開発建設部、釧路湿原、釧路国際ウェットランドセンター）

22日（3日目）、釧路からスタート。釧路開発建設部を訪ねる。釧路川に関する調査項目の打ち合わせ後に釧路湿原・釧路川（図6）を案内していただく。釧路川は流域面積2,510 km²、流路延長154 kmの河川である。国内初のラムサール条約登録湿地として知られ、人の手付かずの湿原地帯が広がっており、その中を釧路川が流れている。基本高水流量は1,200 km²と低く設定されているのは、年平均降水量が約1,000～1,200 mmと少ないことはもちろんだが、上流に屈斜路湖という天然のダム、下流に釧路湿原という天然の遊水地があることが要因とも推察できる。

そんな釧路川は1977年頃から川のショートカット化が進行し、蛇行部が減少した。これにより、洪水は早く流れるようになったが、河床低下が起り、河川へ流れ込む土砂量が増加し、湿原に土砂が多く流入するようになり、湿原植生が変化し、湿原の陸地化が徐々に起こっており、問題になっている。

この現状を受けて、2003年頃から自然再生事業がはじまる。2006年頃から旧川復元事業が展開されている。排水路と化した直線河道を埋戻し、三日月湖として残っていた旧川につなぎ直し、再び蛇行を取戻した。今でこそ各地で展開されている自然再生事業だが、当時として先進事例だったことは間違いない。河川管理者自らが行った事業に対し、再評価を行い、課題のある川づくりに対しては、例え戻る方向であっても大きな決断で舵を切る姿勢は素晴らしいと思う。また、釧路川には釧路国際ウェットランドセンターという釧路市役所の環境保全課の職員の方々が事務局を務める任意団体があり、お話を伺った。旧川復元後のモニタリングを土砂、植物、水生生物の視点から市民と一緒にやっている。釧路市はじめ周辺市町村の自治体も「釧路湿原は何よりの地域財産」と認識されており、地域の人々の関心も高い。釧路川を扱う河川管理者、釧路湿原に関心を喚起する市町村、釧路湿原に誇りをもつ市民。この三者全てには釧路湿原への愛着が深く感じられる。



図7 網走川

5. 網走川（北見河川事務所）

22日夕方に列車で釧路湿原内を抜け網走へ。釧路湿原地帯を列車が抜けている時には広大な湿原に沈む夕日が美しく、列車移動の醍醐味を感じる瞬間であった。列車に揺られること2時間半。網走に到着。あたりはすっかり真っ暗。駅には網走刑務所のモニュメントが置いてある。宿にチェックイン後、まさに夕食を食べに行くのに、網走川沿いを散歩。川沿いは歩きやすい歩道や階段、街灯などが設置されていて、散歩するにはとてもよい空間。できるだけ川に行った時には現地の川の水に触れるようにしているため、網走川の流れにそっと手をつけてみた。河口付近ということもあってかそんなに冷たくない。道東の川の感触をしばし楽しんだ。

23日（4日目）、網走からスタート。網走市自体には立ち寄る施設等は予定になかったの、宿周辺から朝の網走川を見て写真を一枚。「網走川」と書かれた看板の鮭と網走川がいい構図に収まった。

網走川は流域面積1,380 km²、流路延長115 km、基本高水流量設定1,200 m³/sの河川である。河口から7 km地点に網走湖がある（湖面32.3 km²、周囲長42 km、汽水湖）。もともとは淡水湖であったが、近年の海水流入量の変化により、湖の下層にある無酸素状態の塩水層が上昇傾向にあり、湖沼環境に影響をもたらしている。これにおける対策として、『網走湖塩淡水境界層制御実験施設』を設置し、湖沼環境の改善を図っているようだ。

河口付近に湖がある河川は青森県の高瀬川や島根県の斐伊川にもあったが、珍しい河川環境であると同時に環境の変化が大きく、注視する必要がある川と言えるだろう。



図8 吊り橋と無加川（吊り橋の向こうは中の島）

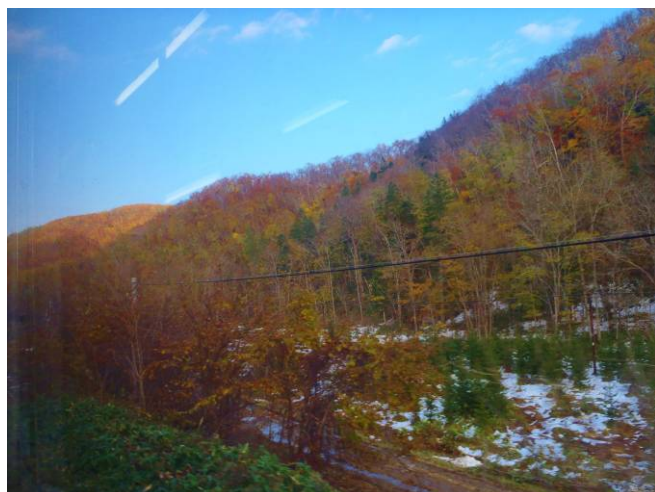


図9 四層コントラスト風景の車窓

6. 常呂川と川の内科医（北見河川事務所）

網走を後にし、北見市へ。北見市には常呂川が流れている。網走川と常呂川を管理している北見河川事務所へ。打ち合わせを済ませた後、同事務所のSさんから河川生態系やモニタリングの心構えのレクチャーをしていただいた。

① なぜ環境調査は必要なのか？

⇒目標とした望ましい環境(結果)を評価するため

② 観測の注意点

⇒本来は「観察測定」という意味。対象が未知の場合、重要なのは観察。

③ 環境と生物の関係を把握するには？

⇒生息種だけ把握してもダメ、その種が利用している場の利用関係の把握重要(営巣場、採餌場、移動経路など)

④ 見た目の豊かさに騙されてはいけない。

⇒単純な水路でも樋門があることで付着生物や底生生物が集まる、それを餌とする生物相が集まる。

と、日常的に目的を見失いがちのモニタリングの目的やモデリングの意義をしっかりと整理されていて、聞いていて大変新鮮なレクチャーだった。

また、その後付近の常呂川を案内していただくことに。常呂川と支流の無加川の合流点にある中の島公園(図8)に。常呂川は流域面積1,930km²、流路延長120km、基本高水流量1,900m³/sの河川である。この川では現在大腸菌発生が問題となっており、中流域以降では水質的に注意が必要な状態であるという。原因は未発酵な家畜糞尿などの肥料が河川に流出すること。一見見た目では分からない川の水質が課題となっている。

また、ヘム鉄と森にある有機体が結合して川に流れることで、サケの生育に必要な栄養源が海へ供給される。その鉄を森に運んでくるものこそがサケであり、サケが上流域の河原で亡骸をさらし、クマなどの動物が森の中に運ぶことに重要な意味がある。目に見えない川の中での現象を注意深く診断するSさんは川の外科医ならぬ、川の内科医だ。川にとって外科的治療も重要だが、内科的治療はもっと重要かもしれない。

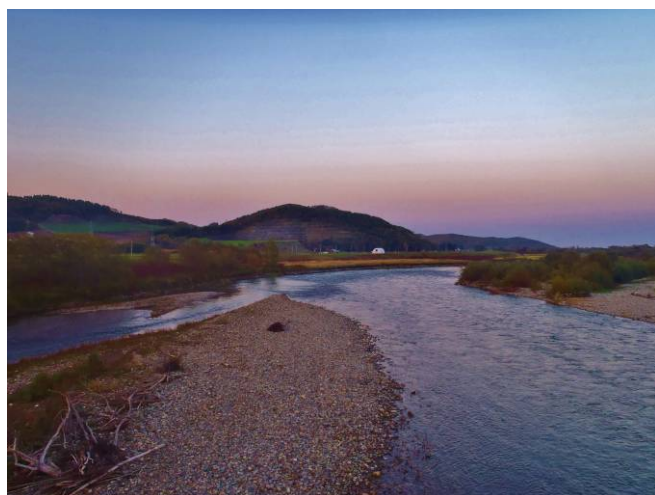


図10 夕暮れの湧別川

7. 遠軽と湧別川（遠軽開発事務所）

北見を後にし、遠軽へ。遠軽へ向かう途中の列車の中からは秋晴れの澄み渡った空、色づいた山、山の麓に残る緑、先週一時的に降った雪と青・赤・緑・白の4層のコントラストが美しい。遠軽開発事務所へ。最初誤って、遠軽にある庁舎の方へ行ってしまうアクシデントに見舞われるものの、事務所の方に湧別庁舎の方を案内していただく。その途中、湧別川を見た。礫河原がある川の夕暮れ風景は最高に美しかった。

遠軽開発事務所管轄の湧別川(流域面積1,480km²、流路延長87km、基本高水流量1,800m³/s)と渚滑川(流域面積1,240km²、流路延長84km、基本高水流量1,200m³/s)について管轄している。面白いことに湧別川(河口：遠軽町)、渚滑川(河口：紋別市)の河口付近は海岸線に並行する形で海に流出しており、砂州の発達が顕著である(河口詳細の写真を見たい人は河川環境管理財団編『日本の河口』(※WEB閲覧可)がおすすめ。)湧別川には、湧別川アウトドアクラブYU-PALがあり、対応していただいた事務所の副所長さんも参加されているそうだ。

今回時間が無くて渚滑川には立ち寄る事ができなかったが、また改めて時間を取って訪問したい。



図 1 1 美瑛川河川敷のグラウンドゴルフ場



図 1 2 石狩川本川への放水路の永山新川

8. 西神楽の美瑛川（NPO 法人グラウンドワーク西神楽，旭川河川事務所）

24日（5日目）は旭川市からスタート。（友人の招きで旭川市は一度訪問し、講演させてもらう機会があった。）朝一で西神楽へ。NPO 法人グラウンドワーク西神楽の事務局長の成田さんにお会いする。成田さんらは西神楽地区のまちづくりや川づくりを自らの手で行っており、全国のグラウンドワーク活動の先駆けをつくった先進事例である。

この会で自主事業として、美瑛川河川敷のグラウンドゴルフ場の運営がある。財団法人等が河川占有許可を取って行っている事例はみたことがあるが、NPO 法人が占有事業をやっているのは初めて聞いた。様々な法的対応が必要になってくる中で、元々事務官で河川に詳しい成田さんの存在は会にとって大変大きいだろう。美瑛川の河川敷にある「西神楽さと川ゴルフ場」（図 1 1）に連れて行ってもらった。河川敷のグラウンドゴルフ場には多くのゴルフ客でにぎわっていた。すぐ脇には美瑛川が流れ、心身の健康増進には最高の場所だ。

また旭川河川事務所を訪問した後は分水路の永山新川（図 1 2）を見学させてもらったが、美瑛川といい永山新川といい美しい場所が旭川には多い。

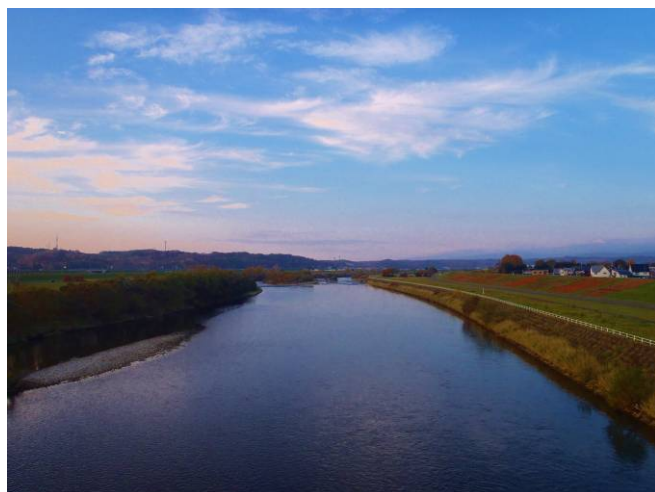


図 1 3 曙橋から天塩川を望む

9. 再びの最北の大河へ（名寄河川事務所，NPO 法人なよろ観光まちづくり協会）

旭川を後にし、名寄へ向けて出発。列車で塩狩峠を越え、天塩川水系へと入る。名寄に到着し、名寄河川事務所を訪ねる。2011年にゼミ合宿で天塩川を訪問した際にはこの事務所の方に天塩川の事業についてご説明いただいたことがあった。

名寄河川事務所調査項目に関する打ち合わせをしている時に対応して下さった副所長さんがおもしろいものを提供してくれた。「北海道には川の時刻表というものがあるんです。ある国交省の職員で電車が好きな方がおましてね、電車で川を渡る時、いつどんな川を渡っているか分かったら車中の旅がもっと楽しくなるでしょと。」このアイデアは本当に面白い。川を身近に感じてもらうための取り組みとしてぜひ他の地域でもやってほしいと思ったが、ダイヤの多い関東をはじめとする大都市圏ではありすぎて一枚の紙には書ききれないかもしれない。電車の本数の少ない地域ではおすすめでと思う。『北海道川の時刻表』は以下のページからダウンロードできる。

http://www.hkd.mlit.go.jp/zigyoka/z_kasen/kawa_jikoku/

名寄河川事務所を訪問した後に、曙橋まで行き、天塩川を眺める。前に天塩川を眺めた場所とは別の場所だったが、流れをみていると2年前にみた広大な原野を流れる川を思い出した。

その後、NPO 法人なよろ観光まちづくり協会の野間井さんを訪ねる。実は野間井さんらはNPO 法人天塩川リバーネット21の事務局をしていたが、7月に会が解散してしまった。長い天塩川を上下流に渡ってつなぐ活動で、カヌー大会や一斉清掃など流域市町村を広く巻き込みながら様々な活動を展開していた。それだけになってしまったことは大変寂しい。理由としては昨今の社会情勢の煽りを受け、活動資金が毎年減少傾向だったことと、中流域の市町村などの参加が難しくなってきたなど、人的、金銭的両方の影響があったようだ。大変素晴らしい活動だっただけにいつかまた復活してほしい。



図 1 4 2011 年ゼミ合宿時の天塩川河口



図 1 6 天塩川河川公園



図 1 5 川口遺跡風景林からの天塩川の河口 (2011)



図 1 7 天塩川を清流にする会のヒアリング

10. 最北の河川管理者と天塩川（幌延河川事業所、NPO 法人天塩川を清流にする会）

名寄を出て、夜のうちに特急で幌延へ。列車は天塩川に沿って走っているが、外は明かりが無くて全く川が見えない。（本来なら昼間に美深町、音威子府村、中川町付近などの天塩川を堪能したかったが、スケジュール的に致し方ない。）特急を使っても数時間乗車していなければならぬことからもいかに長いかを実感する。

25日朝、幌延河川事業所の方とお会いする（天塩川は大河川であるため、下流部はこの事業所が管理している）。その後、天塩川も案内していただいた。

天塩川は流域面積 5,590 km²（北海道 3 位）、流路延長 256 km（北海道 2 位、全国 4 位）、基本高水流量 6,400 m³/s の大河川である。北にのぼって流れることから、「塑北の大河」などと呼ばれることもある。2011 年 9 月のゼミ合宿では、天塩川上流域から河口まで 4 日間かけて旅して、河口の防波堤の上にみんなで寝転び、荒々しい天塩川の河口を眺めた記憶がある（図 1 4、図 1 5）。そういう意味でもとても思い入れのある川だ。この事業所にお勤めの I さんは最北の大河の河川管理者ということになる。冬になると天塩川に吹く風は冷たく、川を巡視する河川管

理者にも容赦なく襲いかかる。

この日は雨が降っていて、雨とともに河口から冷たい風が吹き付けて冷たかった。天塩川河口の天塩町付近は河川公園（図 1 6）になっており、ダウン・ザ・テシオッペというカヌー大会の時にはここがゴール地点になったりもする。また、天塩町はフットパスコースを策定しており、天塩川に沿ったコースができています（道の駅⇒ロクシナイ川⇒鏡沼海浜公園⇒キャンプ場⇒天塩港⇒天塩川河川公園：

http://rumoifan.net/taiken/p_02/12te_footpath_MAP.pdf）。

I さん曰く、晴れた日には天塩川の河口から夕日に染まる利尻富士が見え、最高の眺望を味わえるそう（これは夏にまたくるしかない！）。また、河口付近には川沿いに続く川口遺跡風景林があり、オホーツク文化を知ることができる。2 回目の再訪も大変充実したものとなった。

その後、天塩町役場にて、NPO 法人天塩川を清流にする会の方々（図 1 7）にお会いした。朝から会員の皆さんが集まって下さり、私の調査に快くご協力いただいた。NPO 法人リバーネット 21 が解散した今、天塩川を団体の名に掲げた市民団体はここくらいしかないのではなかろうか。どうか天塩川のように長く活動も続いてほしい。



図 18 留萌川



図 19 城壁のような留萌ダム

11. 城壁のごとくそびえたつ留萌ダム（留萌ダム管理支所，るもいエコ村）

天塩川を後にし，留萌へ。留萌川（図 18）を遡り，留萌ダム管理支所へ。ダム管理者の方にダムを案内していただく。留萌ダムは堤高 41.2m，堤頂長 440m，総貯水容量 23,300 千 m³ の多目的なロックフィルダムである。2009 年に完成したばかりの新しいダムだ。治水と水道用水と維持用水の 3 目的のダムであるが，現在は治水と維持用水としてのみの運用になっている。留萌市の上水道事業がまだ追いついておらず，水道用水としてのダムの需要は今現在発生していない。

ダムの堤体が見えてきた瞬間は堤体の低さとのっぺりと続く堤頂長と黒いロックであることからまるで城の石垣のようで，ダムと意識してこなければ気づかないちょっと変わったダムだ（図 19）。このダムは建設当初の水源ビジョン作成時の委員会から発展させたかたちで「るもいエコ村」を発足。ダム管理所で「るもいエコ村」村長の中尾淳さんにお話を伺った。活動としてユニークなのが冬の活動。ダムの堤体に積もった雪壁を利用した「キャンドルナイト」や「かんじきダム湖歩き」などがある。雪国ならではのダムを利用したイベントで，これが名物になるとおもしろそうだ。



図 20 土砂搬入により消失の進む篠路福移湿原

12. 消えゆく石狩川の湿原，残された湿原の女神を守れ！（認定 NPO 法人カラカネイトトンボを守る会～あいあい自然ネットワーク～）

26 日（7 日目），札幌まで戻ってきた。最終日は認定 NPO 法人カラカネイトトンボを守る会事務局長の綿路昌史さんにお会いした（高校の生物の先生でもあるため私は綿路先生と呼んでいる。）

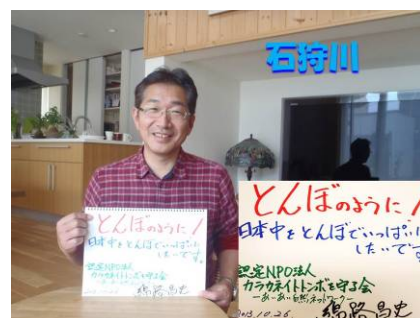
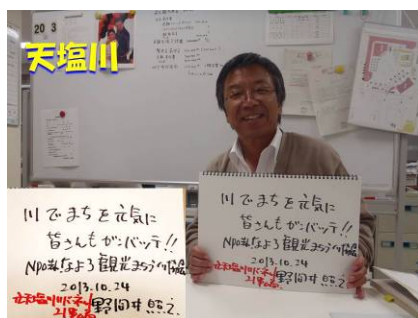
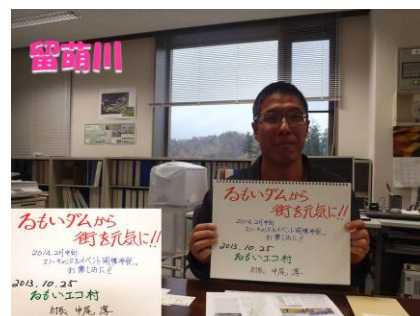
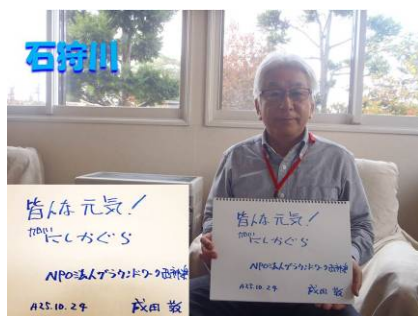
綿路先生とは高校時代からの川仲間。世界子ども水フォーラムや川の日ワークショップ等で毎年東京でお会いしていた。年賀状のやりとりの中でも「札幌に遊びにおいで！」といつも書いていただいていた。念願叶って伺うことができた。綿路先生が高校の理科研究部の研究活動を指導していたことがきっかけで，高校生の研究活動の成果を地域の人にも知ってもらうことをきっかけにはじまる。教育の上でもこの自然の素晴らしさは子供達に伝えていかなくてはならないし，同時に子供達が故郷と慕える自然を残していかなければならない。このあいの里地区周辺には石狩川流域で唯一残された湿原，篠路福移湿原がある（石狩湿原の 99.8% は消失してしまったという）。そこに棲むカラカネイトトンボという固有種で，学名は *Nehalennia speciosa*，「ゲルマン（ベルギー）の女神」という名前。そこで，湿原にひそかに残る女神さまをお守りしようと団体名を「カラカネイトトンボを守る会」と命名。綿路先生の湿原への愛着と教育者としての想いがこの会を生んだ。

しかしながら現在 2001 年頃からこの湿原は業者が自身の所有権のない土地にも関わらず土砂埋め立てを行っており，篠路福移湿原は消失の恐れがある（図 20）。業者と話し合いを続けたが平行線で，緊急的には会がナショナルトラスト運動を展開し重要度の高い箇所から土地を買い，湿原消失を食い止めようとしているが焼石に水だ。「下世話かもしれないが会にお金が欲しい。お金があれば少しでも多く土地を買える。」そんな篠路福移湿原を巡って会と業者は現在，札幌地方裁判所にて裁判中で 2013 年 12 月 5 日に判決が下される。なお，本会への寄付は会 HP より。

<http://www7b.biglobe.ne.jp/~karakane/>

13. おわりに

今回札幌を起点に北海道の道東、道央、道北をぐりと一周したが、北の大地のスケールに驚かされることばかりであった。逆に意外だったのは流域面積や流路延長の割に道東の川の基本高水流量の設定が小さかったこと（本州では流域面積 1,000 km² あれば基本高水流量設定が 4,000m³/s 近くになっている。）。降水量の違いは言うまでもないが土地に余力があるのも然りだろう。基本高水設定が小さいと当然だが、堤防も低い。なので、川との距離はより近く感じられた。次回は小樽、函館、苫小牧、岩見沢、滝川などを流れる川を 11 月に周る予定である。雪化粧の川が見られるのではないかとちょっと期待したい。最後に今回の調査行程を周るに当たり、ヒアリングポイント等の調整にご協力いただいた国土交通省本省の鈴木高さん、北海道開発局の松原寛さんに感謝申し上げるとともに、各現場の川事情について熱意と愛着をもって語って下さった河川管理者のみなさま、市民団体のみなさまに感謝申し上げる。そして、今回の旅程を一緒にまわってくれた『川と人』ゼミの斎藤裕佑君、鴨志田穂高君ありがとう。



- ・滞在日数7日間
- ・北海道移動距離:約1,100km
- ・ダムカード獲得枚数:1枚
- ・訪ねた河川事務所・開発建設部:8機関
- ・名刺交換した人:33名
- ・旅をサポートしてくれた人:2名
- ・出会った行政の人:12名
- ・出会った市民団体数:8団体
- ・旅で出会った人:約50名



川系男子の 北海道地方①『川と人』めぐり



完



【筆者について】

坂本 貴啓（さかもと たかあき）

1987 年福岡県生まれ。北九州市で育ち、高校生になってから下校途中の遠賀川へ寄り道をするようになり、川に興味を持ち始め、川に青春を捧げる。高校時代にはYNHC（青少年博物学会）、大学時代ではJOC（Joint of College）を設立して川活動に参加する。自称『川系男子』。いつか川系男子や川ガールが流行語になることを夢みている。

筑波大学大学院 システム情報工学研究科 博士後期課程 構造エネルギー工学専攻在学中。白川直樹研究室『川と人』ゼミ所属。研究テーマは『河川市民団体における活動量の定量的分析』と題し、河川市民団体の活動がどの程度河川環境改善の潜在力を持っているかについて研究中。最近のお気に入りにはプールで潜水すること。

水辺からのメッセージ No.54

岡村幸二 (JRRN 会員)

太古の森のおもかげ： 山城原野の植生を今に残す 乳(ただす)の森



撮影：2013 年 9 月（京都府・京都市左京区下鴨泉川町）

◆下鴨神社（賀茂御祖神社）の深い森

平安遷都以前の山城盆地は湖と森におおわれて、小川に沿って水を好むカツラの樹が多数生えていたようです。下鴨神社境内に広がる乳の森は常に静寂さにつつまれ、その中を今でも複数の小川が瀬音をたてながら流れています。

瀬見の小川が流れる森の周辺では、太古より様々な命を育み、静かに見守ってきました。「ゆく河のながれは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。」鴨長明の代表作『方丈記』が川の風景で始まるのは偶然ではないようです。

(国内の河川・流域再生に関する主なイベント)

■第 6 回 いい川・いい川づくりワークショップ

○日時：2013 年 11 月 2 日(土)～11 月 3 日(日)
○主催：いい川・いい川づくり実行委員会
○場所：国立オリンピック記念青少年総合センター（東京）
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1635.html>

■水辺フォーラム「水都江東の歴史とこれからを考える」

○日時：2013 年 11 月 3 日（日） 15:00-17:00
○主催：公益財団法人 江東区文化コミュニティ財団
○場所：東大島文化センター レクホール（東京）
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1782.html>

■平成 25 年度土木研究所講演会

○日時：2013 年 11 月 5 日（火） 10:00～17:05
○主催：(独) 土木研究所
○場所：一橋大学一橋講堂（東京）
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1794.html>

■自然再生シンポジウム in 四国

○日時：2013 年 11 月 5 日（火） 14:00～17:00
○主催：重信川の自然をはぐくむ会 等
○場所：愛媛大学南加記念ホール（松山）
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1797.html>

■第 10 回柿田川シンポジウム

○日時：2013 年 11 月 9 日（土） 14:00～17:00
○主催：柿田川生態系研究会
○場所：ホテル・エルムリージェンシー（静岡）
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1811.html>

■国際フォーラム『グレーインフラからグリーンインフラ - 強靱なくにづくりに向けて』

○日時：2013 年 11 月 11 日（月） 14:00～17:45
○主催：(公財)日本生態系協会
○場所：文京シビックホール小ホール（東京）
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1803.html>

■第 16 回 河川生態学術研究発表会

○日時：2013 年 11 月 13 日（水） 10:30～17:30
○主催：東京証券会館ホール（東京）
○場所：河川生態学術研究会，応用生態工学会
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1787.html>

■第 11 回環境研究シンポジウム「水圏・海洋を巡る環境研究の最前線」

○日時：2013 年 11 月 13 日（水） 12:00～17:45
○主催：環境研究機関連絡会
○場所：一橋大学一橋講堂（東京）
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1791.html>

■第 181 回 河川文化を語る会『描かれた淀川』

○日時：2013 年 11 月 14 日（木） 18:30～20:30
○主催：公益社団法人 日本河川協会
○場所：エル・おおさか（大阪）
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1774.html>

■応用生態工学会金沢「川と水との関わりについて」

○日時：2013 年 11 月 15 日（金） 13:00-17:15
○主催：応用生態工学会金沢
○場所：石川県立音楽堂 交流ホール（金沢）
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1785.html>

■講演会「関東・水と緑のネットワーク拠点百選」

○日時：2013 年 11 月 16 日（土） 14:00～16:00
○主催：(一社) 関東地域づくり協会 他
○場所：埼玉会館 3C 会議室けやき（埼玉）
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1799.html>

■河川生態学術研究会多摩川研究グループ発表会

○日時：2013 年 11 月 20 日（水） 13:30～17:45
○主催：河川生態学術研究会
○場所：ルミエール府中（東京）
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1809.html>

■流域管理と地域計画の連携方策に関するWS

○日時：2013 年 12 月 16 日（月） 15:00～17:30
○主催：公益社団法人 土木学会
○場所：土木学会講堂（東京）
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1801.html>

■平成 25 年度 川に学ぶ全国事例発表会

○日時：2014 年 1 月 17 日（金） 13:00～18:00
○主催：(公財) 河川財団子どもの水辺サポート C
○場所：エッサム神田ホール（東京）
<http://jp.a-rr.net/jp/news/event/1805.html>

(海外の河川・流域再生に関する主なイベント)

- 2013.11.12-14(仁川/韓国) Smart Water Grid International Conference 2013
- 2013.12.4-6(チェンナイ/インド) HYDRO 2013 International
- 2014.1.7-9(シンガポール) 7th Int. Symposium on Environmental Hydraulics ISEH
- 2014.2.24-27(パース/豪州) 35th Hydrology and Water Resources Symposium
- 2014.6.23-27(トロント/カナダ) EcoHydraulics 2014
- 2014.6.25-27(ブリスベン/豪州) 5th Int. Symposium on Hydraulic Structures
- 2014.9.21-26(リスボン/ポルトガル) IWA World Water Congress & Exhibition
- 2015.4.12-17(Daegu/韓国) 7th World Water Forum

■ JRRN の登録資格（団体・個人）

JRRN への登録は、団体・個人を問わず無料です。
市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、
所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご
参加を歓迎いたします。

■ 会員の特典

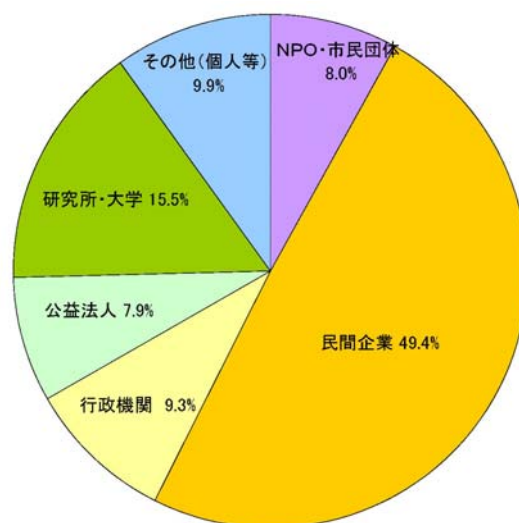
会員登録をされた方々へ、様々な「会員の特典」を
ご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した
「JRRN ニュースメール」が週 1 回メール配信され
ます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が
入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加
することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集
の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベ
ント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川
再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援
を受けられます。

■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2013 年 10 月 31 日時点の個人会員構成
(個人会員数：634 名、団体会員数：52 団体)

JRRN 会員特典一覧表(団体会員・個人会員)

提供サービス	JRRN 個人会員	JRRN 団体会員	非会員 (一般)
1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1	◎	◎	◎
2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2	◎	◎	◎
3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3	◎	◎	×
4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3	◎	◎	×
5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4	◎	◎	×
6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5	◎	◎	×
7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6	△※7	◎	×
8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載	×	◎	×
9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8	×	◎	×
10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9	×	◎	×

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

【お気軽にお問い合わせください】



日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局
公益財団法人リバーフロント研究所 内
〒104-0033 東京都中央区新川 1 丁目 17 番 24 号 新川中央ビル 7 階
Tel:03-6228-3862 Fax:03-3523-0640 E-mail: info@a-rr.net URL: <http://www.a-rr.net/jp/>

JRRN 事務局は、「アジアにおける河川再生のためのネットワーク構築と活用に関する研究」の一環として、公益財団法人リバーフロント研究所と株式会社建設技術研究所国土文化研究所が公益を目的に運営を担っています。

